近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情

THE EARLY STAGE OF MAKING A GROUP OF GUEST-HOUSES AROUND THE HIGASHIYAMA-AREA IN THE MODERN PERIOD, KYOTO

矢ヶ崎 善太郎*
Zentaro YAGASAKI

After the construction of the Lake-Biwa Canal, some guest-houses (villas) were built around the Higashiyama-area, in Kyoto. Yamagata-Aritomo started to build a guest-house, named the 3rd MURIN-AN near the Nanzenji-temple. This building work was completed by the united efforts of some potentates in politics and industrial world. Making process of these guest-houses had mutual relations with the preservation of scenic beauty around the Higashiyama-area. Building work of the 3rd MURIN-AN by Yamagata accelerated the making this group of guest-houses.

Keywords: the Modern Period, Kyoto, guest-house (villa), SUKI-KUKAN, MURIN-AN, Yamagata-Aritomo

近代、京都、別邸、数寄空間、無隣庵、山縣有朋

研究の目的

明治の中期から昭和のはじめにかけて、京都の東山山麓、特に南禅寺近傍では、政治家や実業家など東西の貴顕たちによって多くの「別邸」あるいは「別荘」「山荘」などと呼ばれる邸宅施設が造営され、そこでは建築と庭園とによって、いわゆる「数寄的な空間」が営まれていた。その庭園の多くに、琵琶湖疏水の水が導入されていることはよく知られている¹⁾。現存する遺構から判断すると、この「数寄的な空間」は、施主の豊かな経済力を背景にして営まれたもので、茶の湯によるもてなしや茶会が可能な施設を構えるなど、様々な趣味的生活を可能にするものであった。

遺構の庭園の多くが琵琶湖疏水からの水系で結ばれており、それらの庭園が流れる水のデザインを特徴としている²⁾ことから、琵琶湖疏水の開通以後、疏水の水を邸内に導入することが可能であることを前提条件として当地域に多くの別邸が建設されたことは容易に想像できる。しかしそれは、施主となる貴顕たちが恣意的に琵琶湖疏水のまわりに邸を営み、偶然に別邸群が形成されたのではなく、当地での別邸の造営を促す、当地域ならではのより積極的な誘因がほかいくつかあって、琵琶湖疏水の水が利用できる環境のもとで集中的に別邸群が形成されたものであった。すなわちこの別邸群は近代の京都、特に東山という地域固有の性格を背景にして成立したも

のであったと考えられる。

本稿は、当地で最初期に別邸を営んだ山縣有朋の別邸造営の経緯から、別邸地が形成される初期の状況を探り、このような別邸群の形成が先ず何によって推進されたのかを明らかにしようとするものである。これはこれら別邸群の多くに共通して営まれた、建築と庭園とによる「数寄的な空間」に、近代の茶の湯の場としての性格を見だし、それを数寄空間の展開の歴史の中に特徴的に位置付けるための準備作業としても位置付けられるものである。

なお、ここで用いる「東山地域」あるいは「南禅寺近傍」とは、地域を厳密に限定しているものではなく、京都の東山山麓で琵琶湖疏水が通過する、現在の左京区粟田口・南禅寺・岡崎・聖護院・鹿ヶ谷・浄土寺付近を漠然と示している（〈図-1〉）。また、別邸や別荘、山荘の呼称も特に区別するものでない。利用状況から本邸・別邸いずれとも判断し難い施設も少なくない。厳密な性格付けの必要性に関しては今後検討することとして、ここでは本稿で用いた史料あるいは参考文献の用例にならって、主として「別邸」の語を用いることとする。

1 東山地域の風致保存と別邸地化

本節では、明治23年（1890）琵琶湖疏水開通以後の東山地域の変

* 京都国際建築技術専門学校建築科 教員・工修

Lecturer., Dept. of Architecture, Kyoto Architectural School of Engineering, M. Eng.

(図-1) 「現在の東山地域」

国土地理院1:25,000地形図「京都東南部」をもとに作成。
点線は琵琶湖疏水を示す。

貌を、周知の事実を踏まえ、新たな知見を加えながら概観し、本稿を展開する背景を述べる³⁾。

1. 1 琵琶湖疏水の開通と工場地への期待

近代京都の発展は、琵琶湖疏水の開通に拠るところがきわめて大きかったことはいままでもない。特に豊富な水流が通過する、東山山麓の南禅寺から岡崎付近にかけての地域にとっては、その地域的性格を決定づけるほどの多大な影響をもたらされた。

明治16年(1883)の琵琶湖疏水『起工趣意書』に示された疏水事業の目的のうち、水車動力による製造工業の近代化は、機業をはじめとする京都の伝統産業界にとって、きわめて期待の大きなところであったと推察できる⁴⁾。

琵琶湖疏水の造営がすでに始まっていた明治22年(1889)3月に立案された『疏水及び編入地域(二十一年)を中心とする市街画定案』⁵⁾では、その前文で、東山の風景を「京地ニテ最愛スヘキ」ものとし、南禅寺門前から永観堂・銀閣寺門前に至るまでの地域を「東山ニ於テ最良ノ風景ヲ有スルノ勝地」などと、東山の風光を謳う一方で、「客年六月当府令第七拾号ヲ以テ愛宕郡南禅寺村外八ヶ村ヲ新区部へ御編入相成、右ハ琵琶湖疏水成功ノ後ハ漸ク熱鬧ノ市区ニ変移スヘキ時運ニ向ヒ、加ルニ高等中学校ヲ始メ盛大ナル二三ノ製造所ヲモ建築中ニテ、其盛兆予メト知スヘキノ現況ニ有之」と、すでに琵琶湖疏水の完成を期待した製造工場が建設中であることを伝えていた。

明治20年(1887)、京都織物株式会社が設立する⁶⁾。撚糸・染色・織物の一貫作業による近代的システムを備えた織物会社で、京都府の産業復興事業の一環として明治7年(1874)に設立された「織工場」(同10年より「織殿」)の事業を引き継ぐものであった。同社は設立と同時に、社屋および工場建設用地として愛宕郡吉田村吉田下阿達の官有地の払い下げを受け、さらに将来の撚糸工場建設にそなえて、同年12月2日、南禅寺村下河原の旧南禅寺塔頭少林院の地5,130坪を購入する。この地は明治4年(1871)に上地後、民間に払い下げられた後も特に開発されずにあった⁷⁾。同地の西側には白川が流れており、さらに東側に琵琶湖疏水が開通することで水車動力が容易に得られる地理的条件をもって工場建設の適地と見込まれていたに違いない。

先の『疏水及び編入地域(二十一年)を中心とする市街画定案』では、当地域内において、藤井紡績会社の存在も示し、今後当地域が、商業・工業の「熱鬧地」となることを見込んでいた⁸⁾。『同画定案』で、「建設中」と伝えられた「盛大ナル二三ノ製造所」とは、これらの紡績、織物工場などを示していたものと考えられる。明治維新以来の復興を目指す京都にとって、琵琶湖疏水開通にともなう工場建設がもたらす地域の繁栄に、大きな期待が寄せられていたことが窺える。

1. 2 東山の風致保存と別邸地の成立

明治18年(1885)に着工した琵琶湖疏水第一期工事が同23年(1890)に竣工するまでの間に、水車による工業動力を水力発電に変更したことはよく知られている。同22年(1889)に水力発電所の建設が付帯工事として決定される。同24年(1891)には蹴上発電所が建設され、翌25年(1892)には電気事業が開始された⁹⁾。先に見たようにすでにいくつかの工場が東山疏水付近に建設されていたものの、水車による疏水路付近への工業動力の供給に代わって、京都市内広域へ電力の供給が可能になったことで、琵琶湖疏水の水路付近における工場建設をさらに促す大きな要因が失われたことになった。以後この水車動力から水力発電への変更を契機として、当地域の新たな性格付けにつながるもとれる動きが散見される。

明治33年(1900)、内貴甚三郎初代京都市長は、新しい都市構想を提案した。それは「五十万以上百万ノ人口ヲ作ル京都トナス」もので、次の内容をともなっていた¹⁰⁾。

「東方ハ風致保存ノ必要アリ」「北方ハ西陣アツテ尚現況ヲ継続」「教育機関ノ設備ヲナスノ地ハ高燥ニシテ且ツ清潔ノ場所ヲ要スルヲ以テ (中略) 北西ニ集メタシ」「西方ハ現在田畑ニテ別ニ風致上ノ関係ナキニヨリ煙突林立スルモ何等差支ヲ見ズ (中略) 会社商館ノ如キ大建造物ヲ収容スル」「宇治川ノ電動カヲ利用シテ伏見・深草ハ勿論、西ハ花園迄モ工業ノ地トナセバ、前途京都ノ発展ハ甚ダ多望ナルモノ」]

京都の地理的条件も考慮した地域別の開発構想が提示されたことは注目されよう。商工業の振興による都市的発展だけでなく、同時に「風致保存ノ必要」も説き、それは「京都トシテ決シテ放棄スベカラザル事業ナリ」と続けていた¹¹⁾。ここで風致保存の対象として最初に取り上げられた「東方」とは、東山の山容を背景にもつ、明治21年(1888)6月に京都市に編入された東山山麓地域で、本論が主として対象にしている南禅寺近傍の地域を含むものであったことはまちがいない。

この内貴京都市長の都市構想は、京都の人口増加を促すことを目的に提案されており、その基本的性格は明治維新の東京奠都以来の京都振興策とかかわらないものである。「東方」の風致保存の方針は単に歴史的環境の保存という一面的なものではなく、それによる派生的な効果として、東山山麓地域が固有の発展をするであろう可能性を見いだしていたともいえる。

実は、琵琶湖疏水第一期工事が完成した明治23年(1890)以後、前述の内貴京都市長によって風致保存を含めた新たな都市構想が提示された明治33年を前後して、風致の保存を前提として東山地域の新たな性格を方針付けるような具体的な動きが確認できる。

次は、明治39年(1906)10月24日付「日出新聞」記事である。

〔鐘淵紡績会社にては先に当市川端丸太町上る東入京都大学付属病院西手の空地に絹糸紡績工場設置の儀を当府知事に出願せしに当所は将来別荘地として発達すべき見込みあり然るに日々多量の石灰を消費する工業会社を設立するは風致を害するのみならず接近せる病院に対しても少なからざる影響を及ぼすべしとの理由にて認可せられざりし〕

京都府は明治4年(1871)鴨川の東岸、吉田村聖護院領の元練兵場跡に産業基金金を利用して牧畜場を設置していた¹²⁾。牧畜場閉鎖後、鐘淵紡績会社は当地での絹糸紡績工場建設を京都府に申請したが、京都府はそれを認可しなかった。記事はさらに、同社がその後、田中村小字下竹屋(現在の左京区高野)に5千800余坪の土地を購入し工場建設の認可を得たことを報じていた。

この記事から、東山一帯を風致保存の対象とする京都府の方針が確認できる。さらにその風致保存が「将来別荘地として発達すべき見込み」があるためであるとしていることが注目されよう。すなわち、東山一帯が工場地としてよりも、風致を保存すべき対象として認識され、それと連動する現象として、付近に別邸地が形成されつつあったことが窺えるのである。

事実この時期、鴨川以東、南禅寺を中心とする東山地域では、琵琶湖疏水完成以後、別邸あるいは別荘と呼ばれる施設が造営されていた。

例えば後述するように、山縣有朋が木屋町二条の別邸「第二次無隣庵」の地を売却し、南禅寺近傍で新たに「第三次無隣庵」の造営準備を始めるのが、明治25年(1892)頃であった。4年後の同29年(1896)頃には庭園の最初の整備が終わる。また同年、伊集院兼常が第三次無隣庵の近くに別邸を構える¹³⁾。ともに実態がある程度まで解明可能な別邸の初期の実例であり、後に当地域での別邸群形成に大きな影響を与えたことが予想される。

明治29年(1896)10月9日付「日出新聞」に「別荘賣却」広告

京都府京都市東山区
聖護院町八ッ橋屋西向井
地所建家五間餘
坪二百餘坪
現入札日建家五間餘
坪二百餘坪
關入札日建家五間餘
坪二百餘坪
京邸聖護院町八ッ橋屋西向井
持主 山縣有朋

別荘賣却廣告

明治29年10月9日付「日出新聞」の「別荘賣却廣告」

が見いだせる。建家付き土地を「別荘」として売却するため、現地の縦覧と入札の期間を広告するものである。所在地は鐘淵紡績会社が絹糸紡績工場の建設を予定した場所から近い聖護院(原文では「京都聖護院町 八ッ橋屋西向井」とある)であった。施設の実態は詳らかでないが、この頃、当地で別邸に対する需要が期待できたことを示しているとみなされよう。

また先述した通り、京都織物株式会社は、将来の燃糸工場建設地として、明治20年(1887)12月2日、南禅寺村下河原にある旧南禅寺所有地を購入していた。しかしその後当地で同社が燃糸工場が建設した事実はなく、結局同24年(1891)に吉田村の本社工場内で燃糸工場の操業を開始していた¹⁴⁾。旧南禅寺領のこの土地は明治27年(1894)、吉田村の所有地の一部とともに大阪の中村弥吉なる人物に売却される。これも琵琶湖疏水による水力発電の実現によって、南禅寺村での工場建設を積極的に促す要因が失われたことと、付近が別邸地として性格付けられていたことによって、工場の建設が困難であったことが原因であったであろうことは想像できよう。以後この土地は所有者を替え、明治44年(1911)より隣地を所有する角星合資会社によって、明らかに別邸地として開発されていく¹⁵⁾。

管見で得た以上の4つの事例をして、琵琶湖疏水第一期工事の竣工以後、東山地域の南禅寺近傍地域で別邸の建設が行われつつあったことを想像するに十分であろう。

以上から、東山地域の風致保存の方針が打ち出され、それが推進される動きと連動して別邸地が形成されつつあったことがわかる。そうすると風致保存のみならず東山地域での別邸の建設までもが行政などによって人為的に導かれていた可能性も考えられよう。当地域が工場地から風致保存の対象地域としてその性格をかえていくなかで、別邸の建設を促すことが、当地域の固有の発展につながり、京都に、工場建設によるものとはちがう新たな繁栄をもたらすものと期待されていたとも考えられるのである。

2 山縣有朋の京都別邸「無隣庵」の造営事情

本節では、東山地域の特に南禅寺近傍に営まれた別邸の最初期の事例とみなされる山縣有朋の京都別邸「第三次無隣庵」について、その造営に関わる山縣の動向を探り、当地域が別邸地として性格付けられていく契機となった初期の具体的状況を明らかにする。別邸造営に関わる山縣の動向を知る手がかりとしては地元の有力紙である「日出新聞」の記事を主な史料とし、管見で得た他の史料でそれを補う。

2.1 第二次無隣庵の拡張計画と売却

明治・大正期の元勲山縣有朋(1838~1922)は、公務多忙のなかにあっても常に趣味を豊かにし、風流韻事の楽しみを忘れることはなかったという。わけて築庭術にかけては特筆すべきものがあつた¹⁶⁾。山縣が営んだいくつかの邸宅では、自らの指示で庭園を築庭することが多かった。

山縣が生涯に営んだ邸のうち、無隣庵と呼ばれる邸は場所を替えて三次にわたって造営されている。このうち第一次無隣庵は幕末頃郷里の長州吉田駅に営んだ邸で、第二次と第三次はともに京都の別邸であつた¹⁷⁾。

京都で山縣は先ず鴨川西岸、木屋町二条に第二次無隣庵を営む。

ここは高瀬川の開墾などで功績のあった角倉家の別邸があったところで、角倉本邸と木屋町通りを隔てた東側に位置している（〈図-2〉参照）。ここは明治のはじめに上地されたものを、明治24年（1891）7月に山縣が購入したものであった¹⁹⁾。山縣がここでどのような普請を行ったのかは詳らかでないが、鴨川から分流した豊富な水流が横切って高瀬川の起点となる当地の地形は、後に山縣が理想とする庭園観を形成するに至る重要な意味をもつものであった。¹⁹⁾

第二次無隣庵の地を手に入れて間もなく、山縣は敷地の拡張を計画した。次は明治25年（1892）7月13日付「日出新聞」の記事である。

〔山縣伯爵の別邸取上げ ― 京都木屋町二條下る山縣伯別邸管理人下村一貫氏より今度同邸取上げの為め接近の鴨川沿岸地所四十餘坪拝借の議を山縣伯の代理として府知事に出願したるに付き土木主任者は実地に就て視察せしが同拝借出願地は地方税経済に属する樋門及び樋守小屋の所在地なり且つ彼の鴨川横断工事を起すことにもならば特に必要な所なれば此際同地所貸下は断乎として拒絶せんことに内決せし由〕

これは山縣が第二次無隣庵の敷地の拡張を計画し、隣接地の借入を京都府に申し出たが、京都府はその申し出を許可しなかったことを伝えている。

この新聞報道からわずか4か月程後の明治25年（1892）11月、山縣はこの木屋町二条の第二次無隣庵の地を手放し²⁰⁾、後述するように、南禅寺近傍に新たな第三次無隣庵の造営を始める。したがって山縣がこの地を所有していたのは1年4か月間という短期間であ

り、かなり慌ただしく別邸が移転されたことが窺える。

山縣のこの別邸移転については、周辺に商工業地としての賑いが及んできていたことで当地が無隣庵の号に合う地でなくなっていたことが理由としてあげられる²¹⁾。しかし先の新聞記事で山縣は第二次無隣庵の敷地の拡張を計画しており、ここではなお当地で継続して別邸を営むことを前提としていたものと考えられよう。したがって4か月後の第二次無隣庵の売却は、山縣自らが周辺の賑いを避けたというより、敷地が狭隘であったこと、そして京都府から敷地の拡張が認められなかったことに直接の原因があったと考えられる。結果として京都府からの何らかの指示に従ったと解することも可能であろう。

ところで別邸の拡張を計画していた明治25年（1892）、山縣は6月17日より2週間程度、第二次無隣庵に滞在した。「日出新聞」は滞在中の山縣の様子を伝えている。（〔 〕内は掲載日）

〔前号欄外に報道したる如く陸運大將山縣伯爵は一昨日来京木屋町二條下る別荘に投じ昨日は降雨の為何れへも出でず同日朝尾越書記官訪問し一時間計り對話し続て飯倉少佐来訪したり伯は来客に接する餘暇には久原正^(マ)三郎と園基し或は押^(マ)毫を試み居れり〕
〔明治25年6月19日〕

〔（山縣）伯は来京以来木屋町の別荘に於て久原庄三郎氏を相手に揮毫又は園基を試み閑日月を送り居れり一昨日は中井桜洲山人と暮を園み午後より相携へて南禅寺近傍を散策したる由又昨日は北垣知事午前より訪問して一時間餘談話し居りし由京都には二週間許り滞する筈にて本月下旬か来月上旬頃郷里山口へ向け出発する都合なり〕
〔明治25年6月21日〕

〈図-2〉「第二次無隣庵と第三次無隣庵の位置」

田中治兵衛編著『新撰 京都古今全図』1895 をもとに作成。

〔目今木屋町の別荘に滞在中なる山縣伯は兩三日来降雨の爲め終日閑居し中井櫻洲山人并北垣府知事の外絶へて客に接せず時に久原庄三郎氏と園藝を試み居ると云ふ〕

【明治25年6月23日】

上の3つの記事を見る限りでは山縣は、第二次無隣庵を売却する直前の別邸滞在中に、京都府行政や実業界の有力者らと接し、ともに南禅寺近傍を散策するなど閑日月を過ごしていた。

山縣滞在中に第二次無隣庵を訪問し、山縣と親しく接していた久原庄三郎(1840～1908)は、実弟の藤田伝三郎と藤田組を創立しその土木部門を管掌、日本土木会社などの諸企業に参画するなど、主として阪神地方で活躍した実業家である。庄三郎の四男・房之助は久原財閥を形成、通信相や立憲政友会の総裁としても知られる²²⁾。また中井櫻洲山人とは中井弘(1838～1894)のこと。滋賀県知事時代の明治17年(1884)、北垣国道京都府知事らとともに琵琶湖疏水工事を認可および着工させた人物で、京都岡崎の地に内国勧業博覧会を誘致したのも中井であった。明治26年(1893)11月から翌27年(1894)10月までは第5代京都府知事(京都市長兼任)を務めている²³⁾。

売却直前の第二次無隣庵で、山縣と久原や中井との間で何が話し合われていたのか知る術もない。しかし、山縣の有力者との動向が報道され、その後に山縣が第二次無隣庵を売却し東山南禅寺の近傍に第三次無隣庵を造営する事実を勘案すると、山縣の第二次無隣庵売却と南禅寺近傍での第三次無隣庵の建設に、久原や中井が何らかの関わりをもっていたとする仮定も成立しよう。琵琶湖疏水完成以後、東山の風致保存を前提とした新たな発展を期待する京都府行政や実業界の有力者が山縣に新たな別邸造営を促し、敷地として疏水の水が容易に利用できる南禅寺畔近傍の地を提示していたとしたら、山縣の第三次無隣庵への慌ただししい別邸移転も理解されるのである。特に琵琶湖疏水を開通させ、それに伴う東山地域の新たな発展を促す立場にある中井にとっては、南禅寺近傍で山縣に疏水の水流を利用した別邸造営を積極的に促す理由があったものと想像できる。

2. 2 第三次無隣庵の造営

南禅寺近傍で第三次無隣庵の造営がいつはじまったのか、必ずしも明確でない。例えば『京華林泉帖』(註18参照)所収「無隣庵林泉」の解説では「南禅寺總門内の北に在り明治二十五年山縣公爵の別邸として開設せられし所なり」として、別邸の開設時期を山縣が第二次無隣庵を売却したのと同じ明治25年(1892)にしている。これは、第二次無隣庵の売却と同時にすでに南禅寺畔での第三次無隣庵造営の準備が始まっていた可能性を窺わせるものである。

明治33年(1900)11月、黒田天外が第三次無隣庵を取材した時の記録²⁴⁾に、山縣の言葉として「此庭園は此前の川から此方へは、明治二十七年に久原に託して作らしておいたので、其後二十八年の丁度此頃に、清国から帰って少し閑暇であったから、川の彼方の地面を借入れて新たに作るようになった」とある。ここで「久原」とは明治25年(1892)、山縣滞在中の第二次無隣庵を訪れ、山縣と親しく接していた久原庄三郎であろう。明治27年(1894)清国に出征中の山縣はこの久原に託して南禅寺近傍で第三次無隣庵の造営を始めていた。第三次無隣庵の造営の初期の段階で久原庄三郎が築庭に関わっていたことは、第二次無隣庵から第三次無隣庵への慌ただし

い移転に久原が関わりをもっていたとする先の仮定を裏づけるものとして注目される。

そして翌28年(1895)からさらに庭園の拡張工事がはじめられた。同年4月19日、山縣は滞在先の広島から東京の有力官僚である田中光顕に書簡を送った。次はその一部である。

〔叔南禅寺別墅ハ新築瀟灑水声松籟ニ和シ貴意ニ適シたる報道を得必らず我心ニ叶ひ可申と相楽申候²⁵⁾〕

久原に託して工事を起こしていた南禅寺別荘は、その立地条件など山縣の好みに適うものであったのだろう。拡張工事の完成を楽しみに待つ山縣の心情が窺い知れる。

同28年(1895)8月8日付の「日出新聞」には次の記事がみえる。

〔洛東は南禅寺町の山縣侯爵別荘へは今回水利事務所より鉄管を敷設して庭園の噴水其他使用水利に充つる為め引水工事に着手したるがその水量半箇にして工費は五百円内外の予算にて竹内全所技手工事を担当し兩三日中に落成するよし全別荘は昨年来成功為し居るも侯爵は日清事件以来軍務に多忙なりしを以て来京せざりしも今後は時々全別荘に滞在する都合にて器具其他の準備も整ひ居る由〕

拡張工事を継続しながらも、この頃には南禅寺の第三次無隣庵は別邸としての一応の体裁が整い、建築も山縣の滞在に向けて準備がなされつつあったことが想像できる。以後「日出新聞」には山縣の第三次無隣庵の滞在を伝える記事が散見される。

例えば明治28年10月19日には「山縣大將は一昨日午前四時三十五分七條着の汽車にて来京南禅寺なる別邸に投せり昨日午前には岩崎弥之助、久原庄三郎氏訪問せし」と報じ、翌20日には「南禅寺に別邸に滞在中なる山縣大將は一昨日午後本願寺法主大谷光尊師の訪問を受けしが昨日は午前より新古美術展覧会を一覧せり」、同月26日には「松方伯は昨日時代行列を見て後ち山縣大將を南禅寺の別荘に訪ひ暫く対話」と見えるなど、この時山縣は南禅寺の第三次無隣庵に滞在中、すでに別邸には政界や実業界の有力者たちが迎えられていた。

次は明治29年(1896)12月22日付「日出新聞」の記事である。

〔山縣侯来京の期 山縣侯の南禅寺別荘の庭園工事も目下粗ぼ落成を告げたるより一応検分を申出でたれば全侯爵より本年は到底出京出来難きを以て一月二日東京を発し当地へ来る旨の返書ありたりと云ふ〕

庭園の拡張工事が明治29年12月までにひとまず完成をみたことが伝えられている。そして翌30年(1897)に山縣の検分が行われたのだろう。

以上から、南禅寺の第三次無隣庵は久原庄三郎などの協力を得て明治28年(1895)8月頃には山縣有朋の別邸として一応の体裁が整い、10月には山縣の滞在や賓客の訪問を迎えることが可能な状態になっていた。その後も庭園の拡張工事は続けられ、翌29年(1896)の12月には拡張工事の完成をみた。また、先の新聞記事から第三次無隣庵には政界・実業界の有力者の訪問が頻繁であったことが明らかになる。山縣の別邸は単に山縣自身の保養の場であるばかりでなく、政界や実業界の有力者との交流の場であり、言わば中央から離れた政治の場でもあったといえよう²⁶⁾。

ところで、京都地方法務局所管登記簿で第三次無隣庵の土地所有

者の変遷をみると、敷地の西部（南禅寺草川町31）が売却されて山縣の所有となるのは明治29年（1896）のことである。それまでの所有者は京都市であった。また敷地の東部（南禅寺草川町30-6）が山縣の所有となるのはさらに遅れて明治35年（1902）のことである。それまでこも京都市の所有であった²⁷⁾。したがって、山縣は明治29年まで京都市所有の敷地で庭園を築庭し、完成させていたことになる。

次に明治30年（1897）8月3日付の「京都日出新聞」の記事を見る。

〔山縣侯の寄附 山縣侯は洛東南禅寺町字神川に別荘を新築し防火用水として疏水運河の水を引き昨今工事大に進捗したれば将来京都市水利事業の隆盛を企図する為め金二百圓を三十九年度水利事業費の内へ寄附した旨昨日市参事会へ出願せり〕

先に明治28年（1895）8月8日付「日出新聞」でみたように、第三次無隣庵への鉄管の敷設と引水工事は竹内京都市水利事務所技手の担当で行われていた。その工事での京都市水利事務所の協力に対する返礼として、山縣は寄附を申し出たのであろう。寄附の事実については不明だが、南禅寺近傍での第三次無隣庵の造営が京都市の敷地で、京都市水利事務所の積極的な協力のもとで行われ完成していたことは明らかである。

3 まとめ

明治23年（1890）に琵琶湖疏水第一期工事が竣工する以前、水路が通過する東山地域では水車動力を得るに有利な地理的条件をもって、工場が建設されはじめていた。明治維新以来の復興を目指す京都にとって、工場建設がもたらす地域の繁栄に大きな期待が寄せられていた。ところが、明治25年（1892）に電気事業が開始され、京都市内広域に電力の供給が可能になったことで、琵琶湖疏水に水路付近で工場建設を促す積極的な要因が失われた。その後明治33年（1900）、内貴甚三郎初代京都市長は新しい京都構想を提案する。人口増加の推進を旨とするその構想では京都市内の地域別開発構想が示されており、東方は風致保存の必要性が謳われた。

明治39年（1906）10月24日の「日出新聞」で、鴨川東岸の吉田村聖護院で予定されていた工場建設が京都府知事より認可されなかったことが報じられた。そこでは当地域が将来別荘地として発達すべき見込みがあり、工場建設は風致を害する恐れがあることが理由とされていた。先の内貴京都市長の東方の風致保存構想と連動して付近には別邸地が形成されつつあったことが窺え、事実この時期、南禅寺を中心とする東山地域で別邸の建設、あるいは別邸建設に発展する土地取引がなされていたことが確認できた。

南禅寺近傍を中心とする東山地域で最初期に別邸を営んだと目される山縣有朋は、明治24年（1891）の7月に木屋町二条の地を購入し第二次無隣庵を営んだが、翌25年（1892）年11月、所有してから1年4か月後にそこを手放し、南禅寺近傍に新たに第三次無隣庵を造営する。この別邸移転は山縣が木屋町二条の所有地の拡張計画を京都府に出願したが拒否されたことに直接の原因があったと推察された。また、明治25年の第二次無隣庵の売却と同時に第三次無隣庵の造営準備が始まっていた可能性もあり、山縣の慌ただししい別邸移転と南禅寺近傍での第三次無隣庵造営には、当時山縣と親しく交遊をもっていた中井弘や久原庄太郎といった京都府行政・実業界の有

力者が積極的に関わっていた可能性を予想した。

南禅寺近傍では最初、多忙の山縣に代わって久原が第三次無隣庵の造営を始めていた。明治28年（1895）8月頃には別邸としての一応の体裁が整い、以後山縣は第三次無隣庵で多くの政界・実業界の有力者たちの訪問を迎えた。同29年に初期の工事は完成するが、工事が完成した明治29年（1896）まで、第三次無隣庵の土地は京都市の所有にかかるものであり、山縣は京都市から提供された土地で別邸の築庭を行っていた。また、琵琶湖疏水から庭園への引水工事は京都市水利事務所の積極的な協力のもとで行われていた。

以上から、琵琶湖疏水開通以降の東山地域では、当地域の風致保存の動きと連動して別邸地が形成され始めており、最初期に造営された山縣有朋別邸・第三次無隣庵の造営も、風致保存と地域の発展を進める立場にある京都府行政や実業界の有力者によって推進されたもので、京都市や水利事務所の積極的な協力のもとで造営されたことがわかった。山縣の別邸の存在は、京都での政治の場の存在をも意味するものでもあり、東西の貴顕たちに別邸地として京都の東山地域を注目させる契機にもなったと想像される。山縣の別邸造営に際しての、有力者や行政の協力もそれを見込んでのことであろう。やがて東山地域で別邸地が形成されていくにいたるきっかけは、当地域の風致保存を前提としたあらたな発展を促すために人為的に導かれたものであったと考えられる。

【註】

- 1) これまで、当地域のこのような施設に関する論稿は少なくなく、遺構についても個別に調査が進められている。特に代表的なものでは、まず中村昌生博士の一連の研究があげられる。博士は早くから南禅寺近傍の別邸に注目され（博士はこれらを多くの場合「山荘」とする）、調査結果を『和風建築』や『新住宅』などの関連雑誌等で報告を続け、さらに『数寄屋邸宅集成 第三巻 京の別業』などの大著としてまとめられた。鈴木博之博士は当地域で多くの庭園の造営を手がけた庭師・植治と小川治兵衛の活動に注目され、近代の和風空間の性格を知る上で、その解明の重要性をいち早く指摘された（「明治から昭和にいたる数寄屋－植治の世界」『建築雑誌』97巻1195号 pp10-13 建築学会 1982年など）。造園史の分野ではこれらの庭園に関する報告は多く、近年では尼崎博正博士が精力的に調査研究を続け、琵琶湖疏水によってもたらされた水系と東山の庭園文化圏の成立との関係を「南禅寺界限疏水園池群の水系」（『瓜生』第7号 pp61-77 京都芸術短期大学 1984）など一連の論文にまとめられた。また、別邸群の成立や庭園の作庭に直接かかわった庭師・植治の活動については、尼崎博士を代表とし、筆者も参加する「植治研究会」が研究成果を『植治の庭－小川治兵衛の世界』（尼崎博正編 淡交社 1990）にまとめ、その解明作業は今も継続中である。
- 2) 尼崎前掲「南禅寺界限疏水園池群の水系」
- 3) 本節は、拙稿「明治期における南禅寺近傍の別荘地開発」（京都工芸繊維大学工学部学術報告『人文』第38巻 pp49-77 1990）の内容の一部を整理し発展させたものである。
- 4) 『京都の歴史・8 古都の近代』（学芸書林 1975）所収の『起工趣意書』には、当初疏水事業の目的として、「一、水力、すなわち水車動力による製造工業の近代化 二、運輸の利便 三、洛北地域の灌漑 四、精米の水力による動力化 五、市街地の防火用水および飲料水の確保 六、放流による市内小河川の浄化」の6項目が挙げられている。

- 5) 『琵琶湖疏水及水力使用事業』（京都市電気局 1940）所収。同市街画定案は明治22年、北垣京都府知事によって決済されている。なお、編入地域とは、明治21年（1888）6月、京都市に編入された地域で、鴨川以東の粟田口・南禅寺・吉田・岡崎・浄土寺・鹿ヶ谷および今熊野・清閑寺の各地域を示す。本稿で対象とする東山南禅寺近傍地域は、この時京都市に編入された。
- 6) 京都織物株式会社に関する記述は、『京都織物株式会社全史』京都織物株式会社全史刊行会 1969）による。
- 7) 桜井景雄著『南禅寺史』（1940 法蔵館）
- 8) 前掲『疏水及び編入地域（二十一年）を中心とする市街画定案』では「新市街中新設スヘキ路線ノ位置並道路等級及ヒ道路幅広狭取調説明書」として、明治21年に新たに京都市に編入された鴨東地区を9つの地域に分け、発展の見込みの程度を等級付けしている。南禅寺近傍に関わる地域については以下のように説明されていた。
- 第二（前略）「インクライン」下ヨリ鴨川迄疏水本線両側道路（疏水事務所ヨリ工事施工ノ分）及若王寺前ヨリ西疏水本川北側道路ニ合スル処迄ハ工商業共運河ノ利用ヲナス尤適当ノ場所、随テ往来頻繁ノ見込ニ付一等トナス
- 第三（前略）鴨川牧場南角ヨリ聖護院町黒谷門前迄及ヒ粟田青蓮院門前ヨリ吉田町ヲ経テ高等学校前迄、又二条通藤井紡績会社東側仏光寺ヨリ聖護院ヲ横断シ百万遍際道路迄、此三線路ハ工商業共ニ營業ヲナス新市街中最高ノ場所ニシテ（後略）
- 第四 南禅寺山門ヨリ永観堂前若王寺前ヲ経テ銀閣寺門前迄、此道路ニ沿フ処ノ土地ハ工商業ノ利用ニ於テハ他ノ道路ニ比シ稍ヤ劣ル処アルト雖トモ、大差ナキノミナラズ就中新市街ノ漸ク熱鬧地トナルニ随ヒ、工ノ為メ商ノ為メ其ノ他社交上ノ為メ内外人ノ入京スルモノ日一日ニ増加スル火ヲ見ル如シ（後略）
- 以上から琵琶湖疏水の開通が当地域の商業あるいは工業地域としての発展を促し、南禅寺門前から永観堂、銀閣寺門前にいたる地域は商工業の発展に加えて、「社交」を目的とした賑いを予感させていたことがわかる。
- 9) 『京都大事典』（淡交社 1984）、前掲『京都の歴史・8 古都の近代』など。
- 10) 前掲『京都の歴史・8 古都の近代』を参照。原典は『京都市会議事録』（明治33年）
- 11) 京都において、周辺山林の管理による風致保存の動きは明治の初期から見られるという（中島節子「明治初期から中期にかけての京都の森林管理と景観保全」日本建築学会計画系論文集 第481号 pp213-222 1996年3月 ほか）。また、明治28年9月25日付「日出新聞」は、京都府が京都の名勝地の風致保存の方法について、山林の保護を中心として調査を進めていることを報じている。対象となった地域は東山のほか宇治・嵐山・高雄・栴尾の各地域で、何れも官有山林であるが、地方庁の責任において積極的な風致保存の方策が新たに検討されていた。
- 12) 前掲『京都の歴史・8 古都の近代』
- 13) 拙稿「對龍山荘の建築」（前掲『植治の庭—小川治兵衛の世界』 pp71-74）
- 14) 前掲『京都織物株式会社全史』
- 15) 土地の所有者の変遷は法務局所蔵の登記資料による。角星合資会社（および経営者・塚本與三次）による別荘地開発の実態については未だ不明な点が多いが、石田潤一郎・中川理・橋爪慎也「明治期以降の京都市およびその周辺地域における住宅地形成事業について—近代日本の市街地形成に関する考察（その1）」（昭和63年度日本建築学会近畿支部研究報告集 pp909-912 1988）に触れられており、また拙稿「近代京都の東山における別荘地の形成と数寄空間」（『野村美術館研究紀要 5』 pp78-98 1996）でも第二章「（二）塚本與三次と角星合資会社の土地開発」として概要を報告している。
- 16) 高橋篤庵著「目白椿山荘講評」（『葦のあと 上』 秋豊園 1933 所収）、あるいは『山県公遺稿・こしのやまかげ』（東京大学出版会 1979 復刻）所収の解題ほか、山縣の趣味的生活に関する論評は大方一致していると思われる。

- 17) 山縣が生涯に営んだ邸宅の変遷は、鈴木博之著『山縣有朋邸 小田原古稀庵調査報告書』（千代田火災海上保険株式会社 1982）に詳しい。
- 18) 京都地方法務局所管登記簿による。また明治42年、京都で全国園芸大会が開催されるに際して発行された名園案内書とでもいうべき湯本文彦著『京華林泉帖』（京都府庁 1909）の「田中氏二條樋口邸林泉」に「舊角倉氏別邸にて本邸と高瀬川を隔てて其東に在り直に鴨川に臨み高瀬川の全水其邸内を過く明治の初め上地の後山縣公爵及び川田男爵小一郎清水吉次郎を経て近年大阪田中市兵衛の所有たり」とある。
- 19) 拙稿「山縣有朋の庭園観についての一考察」（京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第39巻 pp. 49-61 1991）
- 20) 京都地方法務局所管登記簿によると、木屋町二条の同地は明治25年11月、山縣有朋から三野村利助へ売却された後、26年3月に川田小一郎、36年8月に清水吉次郎、39年12月に田中市太郎、大正7年12月には阿部市太郎にと、その所有権が移転する。註18)の通り『京華林泉帖』には「田中氏二條樋口邸林泉」としてこの庭園が紹介されており、水量豊かな川が樹間を流れる様子が写真で掲載されている。しかしこれは川田小一郎の時代に改修された可能性があり（『同書』解説）、山縣時代の姿がどの程度伝わっているのか不明である。また大正9年、阿部市太郎の時代に庭師・植治（小川治兵衛）によってさらに改修されている（山根徳太郎編『小川治兵衛』1965 所収「小川治兵衛年譜」）。昭和32年以降も新たな所有者によって手が加えられ、現在に至っている（尼崎博正「明治期に築造された京都の庭園—『京華林泉帖』の庭園観との係り」京都芸術短期大学研究紀要『瓜生』第11号 pp1-10 1988年）。
- 21) 例えば、湯本前掲『京華林泉帖』所収の「無隣庵林泉」では「明治辛卯（24年…筆者註）二條樋口角倉舊別邸を得其號を移さる（中略）未だ幾年ならず其煩置を避け新に此邸（第三次無隣庵…筆者註）を営み仍舊號を移し無隣庵號し（下線筆者）」と説明している。
- 22) 新潮社辞典編集部編『新潮日本人辞典』（新潮社 1991）
- 23) 前掲『京都大事典』および前掲『京都の歴史 8 古都の近代』による。なお、京都市はこの当時特別市政をとっており、京都府知事が京都市長を兼任していた。
- 24) 黒田天外著『続江湖快心録』（1907）。これは美術評論家・黒田天外の名邸訪問記で、はじめ「日出新聞」に連載された記事が後に『江湖快心録』（1901）、『続江湖快心録』（1907）、『続々江湖快心録』（1913）の三編に編集されている。
- 25) 『山縣有朋文書 書翰其ノ他（6）』（国立国会図書館憲政資料室蔵）
- 26) 例えば、明治36年（1903）4月21日、日露開戦への方針を決定したとされる、いわゆる「無隣庵会議」がここで行われたことは周知の通りである。
- 27) 尼崎前掲「南禅寺疏水園池群の水系」。この事実早くに気付かれた尼崎博士は「無隣庵の敷地は、明治25年（1892）の時点で京都市の所有であり、地目はすでに宅地であった。その大部分が山縣有朋の所有となるのは、明治29年のことである。したがって、小川治兵衛による作庭はそれ以後とみなければならぬ。敷地の東端部は6年後の明治35年に有朋が所有した。この部分は、明治33～34年頃まで京電の留置線があったところといわれる。したがって、滝流れ附近は、明治35年以後でないと作庭できなかった。」として第三次無隣庵の作庭がいくつかの時期に分かれていたことを示された。

（1997年9月30日原稿受理、1997年12月2日採用決定）